

創世記35章3節 「ベテルに上って行こう」

1A シェケムでの悲劇

1B 個々の事件

1C 娘の凌辱

2C 息子たちの虐殺

3C 身に着けていた神々

2B 横の関係と縦の関係

2A ベテルでの神の約束

1B 手前のシェケム

1C アブラハムに現れた神

2C 土地の購入

3C 自分の名

2B 初めの愛

1C 天のはしご

2C 父への契約

3C 見捨てない約束

4C 明け渡し

3A 全うしていない信仰

1B 全うしたと考えなかったパウロ

2B 死んでいるサルデイス

3B 最後まで競走

本文

創世記 35 章を開いてください。聖書通読の学びは 34 章まで来ました。午後、35-36 章を一節ずつ見ていきますが、今朝 35 章 3 節に注目します。「**私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう。**」

ヤコブの生涯において、最も大きな出来事は、何ととっても御使いとの格闘でした。エサウが四百人の者たちと一緒にやってきているのを聞いて、彼は恐れしました。けれども、御使いとの格闘で、もものつがいを打たれて、びっこを引きました。それで、エサウから逃げることは自分の力ではどうしようもなくなったのですが、主ご自身がエサウの心を変えてくださいました。

1B 個々の事件

1C 娘の凌辱

そして、彼はヨルダン川を渡り、シェケムに住みます。ところが、そこで大きな事件が起こりました。

娘のディナが、その土地の族長の息子シェケムに辱められたのです。そして、こともあろうに、シェケムは彼女を妻にしたいと言いました。

2C 息子たちの虐殺

この話が、野から帰って来た兄たちの耳に入りました。同じレアから生まれた兄、シメオンとレビが激しく怒りました。妹が辱められたからです。そして彼らは、シェケムとその父を騙し、その住民の男たちに、割礼を受けさせました。彼らの痛みがまだ癒えないうちに、男たちをすべて殺し、女子供を捕虜にして、家畜を奪って来ました。怒りに任せて、このようなことを行っただけです。ヤコブは、「こんなことをしたからには、周囲のカナン人とペリジ人の憎まれものになっている。」と言ったら、彼らは悪びれるどころか、「34:31 私たちの妹が遊女のように扱われてもよいのですか」と言い返しています。

3C 身に着けていた神々

ここで一体、何が悪かったのでしょうか？ヤコブが、シェケムの族長に対して、強く抗議しなかったのが問題でしょうか？また、息子二人に対して強く戒めていないのが、問題でしょうか？実は、これらの問題への対処ができた、できなかったということではなく、そもそもの問題があったことが、ここ 35 章を見ると分かります。そのヒントになるのが、2 節と 4 節です。「35:2 **それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。」**」35:4 **彼らは、手にしていたすべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡した。ヤコブはそれらを、シェケムの近くにある櫟の木の下に埋めた。**」そうです、ヤコブ自身は影響を受けていなかったと思いますが、シェケムの町にある異教の慣わしを、家族は取り入れていたのです。

2B 横の関係と縦の関係

娘が凌辱され、兄たちが虐殺と掠奪をやりたい放題行い、收拾がつかなくなったのですが、これらの問題だけに注目してしまうと、本質的なことが見えなくなります。これを敢えて、「横のつながり」と言いましょう。人と人の関係で、これは水平の関係です。それに対して、「縦のつながり」があります。それが、神との関係です。縦の関係です。

キリスト教関連の書物には、幸せな結婚生活、家族生活のためにとかいう主題の本はよく売れます。そして、夫婦のコミュニケーションの秘訣みたいな助言も、その中に書かれています。けれども、そうした水平の关系到私たちは注目しがちです。チャック・スミス著の「クリスチャンの家族関係」という小冊子には、このことが書かれています。

例えば、友だちと喧嘩してしまって、仲直りしたいと願います。個人的な関係をやり直そうとしたり、調整したりします。そうこうしているうちに、今度は、また別の横の関係が悪化します。今、ヤコブが失敗していることもそうですね。娘がレイプされたことについて、どうすればよいか悩んでいるう

ちに、息子がそれを正そうとして、また別の問題を起こしたのです。この本では、こういった横のバランスを正し続けるのではなく、答えは、縦の関係を正していくことなのだとのことです。イエスが、「マタ 6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」と言われました。まず、と言っているところが大事です。そして、加えて与えられます、と言われている所も大事です。まず、神の国と義を求めるところで、これら、水平の関係も加えて正されていくのです。

2A ベテルでの神の約束

それで主が、ヤコブに語りかけられたのです。35 章 1 節を見てください、「**立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。**」そうなんです、そもそも、ヤコブがシェケムに住むことを決めた時に、彼は、主の言われているところにいなかったのです。彼は、約束の地に帰ってきていたのですが、ベテルまで行っていなかったのです。

1B 手前のシェケム

ヤコブはエサウと別れてから、仮住まいを造りました。そこをスコテ(小屋)と呼びました。それから、ヨルダン川を渡河し、そのまま真っすぐに行くと、シェケムです。そこには、カナン人が住んでいます。族長がハモルと言って、息子が町と同じ名前シェケムと言います。

1C アブラハムに現れた神

ここは、かつて自分の祖父アブラハムが、ハランからやってきて、約束の地に来て、初めて主が現れたところです。「12:7 **【主】はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。**」そう、ここは初めて、主が約束してくださったところであり、アブラハムが祭壇を築いたところだったのです。

2C 土地の購入

そういったことがあるからでしょうか、ヤコブは、まず、その町の手前で宿営して、それから天幕を張った野の一角を、ハモルの息子たちの手から買い取りました。つまり、ここの住みついてしまいうつもりだったのです。

3C 自分の名

その思いが表れているのは、彼が祭壇を築いて、自分の名を入れていることです。「**彼はそこに祭壇を築き、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ。**」これは、「神、イスラエルの神」という意味です。自分の名を、祭壇に付けています。

ここに、敢えて言うならば、「霊的怠惰」を、彼は犯してしまったのです。アブラハムが入って来たのは、約束の地の入口であり、そして、そこが約束の地の、地理的に中心の部分だからです。し

かし、ヤコブにとって、神から言われていたのは、ベテルこそが彼が戻って来るべきところです。ベテルは、シェケムから南に、約 60 ㎞行ったところにあります。

2B 初めの愛

1C 天のはしご

ヤコブは、主なる神ご自身から、直接、語られました。夢の中で、天のはしごを見て、そこに主がおられたのです。天につながるはしごには、御使いが上り下りしています。彼は、「28:16 まことに主は、この場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」イエスは、弟子ナタナエルに対して、この、はしごが人の子、すなわちご自身のことを指していると言われています。すなわち、ヤコブは、主イエスにある神の栄光を見たのです。天と地をつなぐ方を見たのです。

2C 父への契約

アブラハムに対しては、シェケムに始め、表れてくださいましたが、ヤコブは、ベテルで現れてくださったのです。そして、そのベテルで、アブラハム、そしてイサクに対する契約を、ヤコブが受け継ぐことを、主ご自身が宣言してくださいました。(28:13-14)

3C 見捨てない約束

そして、道中、約束がかなえられるまで、決して見捨てない、守るとも約束してくださいましたのです。「28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

4C 明け渡し

そしてヤコブは、自分が枕にしていた石を立てて、石の柱として、油を注ぎました。そして、誓いを立てたのです。「28:20-22 神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

こうやって、ヤコブは、ここで主ご自身に出会い、また自分自身を献げる決意を主の前に言い表しました。いわば、ここが彼にとっての「初めの愛」なのです。エペソにある教会に対して、主が言われましたね。「黙 2:4-5a けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。5a だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。」それで、ヤコブにとって悔い改めるとは、初めの行いをすると、シェケムから出て行って、ベテルに行き、そこで祭壇を築き、いけにえを献げることです。

3A 全うしていない信仰

それで、彼の、その旅における信仰を完走したと言えるでしょう。ゴールはシェケムではなく、ベ

テルだったのです。シェケムはあくまでも中間地点であり、そこを越えて、ベテルというゴールに向かわないといけなかったのです。

ヤコブは、おそらくエサウと仲直りできたというところで、一気に緊張が解けたのでしょう。霊的にも、神との格闘をするほどですから、ものすごく張りつめていました。しかし、主が真実を示してくださいました。そこからさらに、主を追い求めるということをしなかったのです。

しかし、そういう油断している時が危険です。後に、ダビデが出てきます。ダビデにとって、周囲の敵と戦って、平定して、エルサレムに平和が与えられることが目的でした。数々と、戦いに勝利していました。残るは、アンモン人の都ラバを攻略するのみとなりました。しかし、こう書いてあります。「Ⅱサム 11:1 年が改まり、王たちが出陣する時期になった。ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエル全軍を送った。彼らはアンモン人を打ち負かし、ラバを包囲した。しかし、ダビデはエルサレムにとどまっていた。」ここで、残りラバを包囲しているのに、自分自身はエルサレムに留まっていたのです。

そこで、彼は夕暮れ時まで床に入っていたことが書かれています。霊的に油断して、一気に不節制な生活に陥ったのです。そして、王宮の屋上を歩いている時に、からだを洗っている女の姿を見たのです。それが、自分の部下ウリヤの妻、バテシェバでした。

1B 全うしたと考えなかったパウロ

信仰的に、ほとんど最後まで歩いているのに、それを全うしていないという霊的問題があります。パウロは、そのことを決して自分に許さないでいました。ピリピ書に書いてあります。彼は、宣教の旅をかなり広範囲で行って来て、今は、皇帝の前に出る囚人としてローマにいます。それでも、彼はそこで油断しなかったのです。自分を鎖でつないでいる親衛隊に福音を伝え、親衛隊の中からかえって信仰を持つ者たちが次々と出てきました。彼は終わりだったのではないのです。

「ピリ 3:12-14 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」そうです、牢に入れられたのなら、もう到達したと考えてもよさそうなものを、彼はそうしませんでした。自分にできることがあります。

思い出すが、カルバリーチャペル・コスタメサの、当時の宣教担当の牧師さんの言葉です。日本にいる牧師で難病にかかって、余命いくばくもない方のために祈っていました。彼は、その牧師さんに、チャック・スミスの黙示録についての本あるいは、聖書講解の翻訳をお願いしていました。

彼のからだは、胸から下はもう麻痺していて、動かないのです。けれども、彼は「胸から上は動く」ことを話していました。だから、その動くところで、主のために働くことができるのです。

2B 死んでいるサルデイス

聖書には、最後まで走らなかったのも、「おまえは死んでいる」とイエス様から言われた、教会があります。サルデイスの教会です。「3:1b-2 わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。2 目を覚まし、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは思っていない。」言い換えれば、彼らは神の前に、自分たちの行いが完了したと思い込んでいたのです。

彼らは生きていとされている教会でした。十分に、教会の体裁があったのです。きちんとしていたのです。けれども、まだ完成していないのに、完了したと思い込んで、霊的には死んでしまっていました。このようになってはいけません。彼らは、「だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。」とイエス様に言われています(3:3a)。

私たちが、神のみことばから、聖霊によって前進すること、チャレンジを与えられていることを知っているのに、「いや、今、もう十分に信仰生活は満足しています。このままで大丈夫です。」と現状維持を宣言してしまっていたら、すでに自分の立っているところが、ちょうど雪解けのクレバスのように、一気に解けて、急降下することがあり得るのです。

3B 最後まで競走

大事なものは、どう信仰を始めたのか？ではなく、「どう全うしたのか？」であります。目標まで走ったのか？ということです。私たちは、多くの注意を、どのように救われたのか？ということに向けていきます。どのように救われたのか、ということをおぼえておくのは、神の恵みを知るのに、非常に大切です。しかし、今、前に向かって進んでいないのに、過去にどう救われたかの話だけをしているのであれば、とても危険です。イエスは、「天の父が完全であるように、完全でありなさい。」とされました(マタイ 5:48)。まだ完全にされていませんか？でしたら、走りつづけましょう。

最後に、ヘブル書 3 章 14 節をお読みします。「私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりでしっかり保ちさえすれば、です。」そう、最初の確信を、「終わりで」、最後までしっかり保っていれば、キリストにあずかる者となっているのです。